

# 読書メモ 2017年6月号（上）

池上彰・佐藤優共著

『僕らが毎日やっている最強の読み方』（東洋経済新報社）ほか

やなぎさわかつひろ  
柳沢克央 編

（信州・上田仮説サークル）

2017年6月24日（土）、6月例会用レポートを  
6月10日（土）に前倒しして発表

## ◎池上彰・佐藤優共著『僕らが毎日やっている最強の読み方』（東洋経済新報社・2016年）

ひとことと言うと、情報処理術≒読書論の本。本文中の重要箇所にもあらかじめ蛍光ペンのような色でラインが引いてある。両氏の勉強法が惜しみなく公開されている。その気になれば中学生でも十分に読める。

本書の要点は巻末の「池上×佐藤式 70+7 の極意を一挙公開！」に示されているので、そのまま引用する。

1. 新聞は「世の中を知る」基本勝つ最良のツール。ネットが普及しても、新聞情報の重要性は変わらない。
2. 情報収集の基本は新聞だが、全国紙一紙では不十分。最低2紙に目を通さないと、ニュースの一部しか拾えない。
3. 朝は見出しを中心に、新聞全体にざっと目を通す。気になった記事は、後でじっくり読む。
4. 全国紙も客観報道とは限らない。社説とコラムで新聞社の本音とメディア全体の

時流を知る。

5. 全国で見ると、地方紙の読者もかなり多い。全国紙は「大都市圏新聞」と考える。
6. 地方紙の「死亡広告」「不動産広告」「書籍広告」に注目すれば、土地柄や経済状況が見えてくる。
7. 地方紙を読むことで、通信社の情報もカバーできる。通信社はニュースが速く、速報性が非常に高い。
8. 通信社は国際面に限らず、すべての分野で強い。ただし、無料サイト「47NEWS」は情報がスカスカ。
9. エリート層が『朝日新聞』を読んでいるのは事実。朝日の論調が嫌いでも「朝日新聞デジタル」は目を通すべき。
10. 『読売新聞』は海外面と生活面が充実している。『毎日新聞』は個々の記者の力が強い。
11. 『日本経済新聞』が難しい人は、無理せず一般紙から。「自分の知識レベル」から背伸びしすぎないのが大切。
12. 定期購読する一紙を決め、あとは駅売りを利用。溜まった新聞は、見出しだけでも目を通す。
13. 新聞は「飛ばし読み」が基本。記事を読むかどうか、「見出し」と「リード」で判断し、迷った記事は読まない。
14. 「見出しだけで済ませる記事」「リードまで読む記事」「最後の本文まで読む記事」の3段階に分けて読む。
15. 電子版を使えば、一紙5分で主要ニュースを押さえられる。紙には切り抜きしやすい、折り込みチラシなどのメリットも。
16. 記事の整理は、切り抜いたあと少し時間を置いて。保管と整理にかける「時間」と「労力」は最少にする。
17. 電子雑誌の定額読み放題は、まさに革命。雑誌との付き合い方が劇的に変わる。
18. 「知りたいことだけ知れる」のがネットの功罪。雑誌は「興味や関心、視野を広げる」ために役立つ。
19. 雑誌には「娯楽」と「実用性」の要素がある。ただし「雑誌は娯楽で読むもの」と考えるのが基本。
20. 週刊誌は「読書人階級のための娯楽」。世の中の雰囲気や流行の話題をつかむのに便利。
21. 週刊誌の問題は「情報の真偽」がわからないこと。「信頼できる書き手の記事」

を中心に読むのが基本。

22. ビジネス誌の特集は、書籍よりも情報が早いこと。初動でざっと要点を押さえるのに便利。
23. あらゆる情報が詰まった月刊誌は、日本独自のもの。「論壇カタログ」「企画の宝庫」として活用できる。
24. 『フォーリン・アフェアーズ・リポート』は、アメリカ外交を知る格好の媒体。日本語サイトもある。
25. 日本語で読める海外情報は、貴重な情報源。まず日本語で読み、気になるものだけ原文で読む。
26. 軍事戦争の話には、ビジネスに役立つ内容も多い。『のらくろ』『失敗の本質』『組織の不条理』はおすすめ。
27. 雑誌は気になる記事が2~3本あれば買う。中吊りで判断しないが、影響力の大きさも知っておく。
28. 新聞と同じで、雑誌も「拾い読み」が基本。隙間時間には雑誌、まとまった時間には書籍を。
29. 雑誌には「理解できない文章」が必ずある。信頼できる書き手の、理解できるものを読むのが大切。
30. 【ネットの大原則①】 ネットは「上級者」のメディア。情報の選別には、かなりの知識とスキルが必要。
31. 【ネットの大原則②】 「非常に効率が悪い」メディア。同じ時間なら、新聞や雑誌を読む方が効率的。
32. 【ネットの大原則③】 「プリズム効果」に注意する。ネットでは自分の考えに近いものが「大きく」見える。
33. 「NHK オンライン」は情報が早い。「ヤフーニュース」は、世間が関心のあるニュースを知るには便利だが、基本は娯楽。
34. ネットは「読む」より「見る」で終わりがち。タイトルで判断せず、中身まで読むクセをつける。
35. グーグル検索はじつは効率が悪いことを知る。ウィキペディアは、内容の信憑性にバラツキあり。
36. 調べ物はネット検索よりも、辞書・事典サイトが効率的。「冥王星」の項目で、情報の新しさを判断する。
37. ネットサーフィンと SNS は、インプットの時間を蝕む。時間を確保するには「ネ

ット断ち」「スマホ断ち」も大事。

38. SNS のメリットは、インプットよりアウトプットにあり。正しい日本語で、誰でもわかる文章を書く訓練から始める。

39. ネットは「依存性」も大きな問題。歩きスマホは「ネット依存」「スマホ依存」の表れ、要注意。

40. ネットにつながらない「不自由さ」が知的強化になる。まずは 1 日 1 時間の「ネット断ち」から始める。

41. ネットの価値は「まとめ記事」より「原文」にある。マニアックなサイトより、公式サイトを見る。

42. 日本語で読める海外サイトはじつはたくさんある。無料サイトだけでも、かなりの情報収集ができる。

43. 資料はスキャンして「エバーノート」に保管。スキャンはテレビなどの空き時間を活用する。

44. 【情報整理の大原則①】「何でも保存」ではなく、保存に値する情報か精査、吟味してから保存する。

45. 【情報整理の大原則②】「とりあえず保存」ではなく、読んだものを保存する。クラウドを「ゴミ箱」にしない。

46. 世の中を「理解する」には書籍がベース。いい基本書を熟読し、基礎知識を身につける。

47. 書店に並ぶ本の書名と帯を見るだけで勉強になる。「失敗しない本選び」には書店員の知識を活用する。

48. いい本に出会うコツは「本をたくさん買う」こと。本は「迷ったら買う」が原則。本の情報は安い。

49. 読むことで優位に立てるのが古典。「読んでいないあなたが悪い」と言えるのが強み。

50. 優れた古典は複数の読み方、読み解きができる。難解な本と格闘し、論理的な思考力を身につける。

51. 自分の専門分野以外については、「通俗化された良書」で時間を節約する。

52. 「読み方」は本の種類で変える。基本書は熟読し、速読の本も「はじめに」「おわりに」は目を通す。

53. 「真ん中」部分を見れば、その本の実力がわかる。真ん中に誤植が多い、文章が乱れた本は読まない。

54. 効率的な読書には「本を仕分ける」ことが大切。理解できない本は2種類に分けて対処する。
55. 一冊を5分で読む「超速読」を駆使して、熟読すべき本か見極め、読む箇所の当たりをつける。
56. 一冊を30分で読む「普通の速読」は、重要箇所を1ページ15秒で読み、残りは超速読する。
57. 本は線を引き、書き込みをしながら読む。速記用のシャーペン、芯の濃さは2Bがおすすめ。
58. 読書ノートには「記憶のトリガー」になる出来事を一緒に書き込むと、関連して本の内容も思い出せる。
59. 読書には「ネット断ち」と「酒断ち」が重要。極論をいえば、「酒を飲むのは人生の無駄」。
60. 「通勤時間は絶好の読書タイム」と考える。飛行機では思ったより本が読めない。新幹線が最適。
61. 読書時間は「心がけ」と「ネット断ち」で作り出す。「いつか時間ができたら本を読もう」では読めない。
62. 本はまず紙で読み、携帯したい本を電子で買う。電子書籍は「移動図書館」「携帯図書館」になる。
63. タブレットはネットサーフィンとSNSの誘惑が強い。電子書籍は、専用端末で読むのがおすすめ。
64. 読書で「知の型」「思考の型」を身につける。基礎知識を強化するには、小中学校の教科書が最適。
65. 歴史の学び直しには「日本史A」「世界史A」を活用。「基本」と「大まかな流れ」がいきにわかり、効率的。
66. 歴史のメリットは、短期間で通史が身につくこと。数学や物理に比べて、学び直しがしやすい。
67. 歴史に興味を持つには『地球の歩き方』も便利。ただし、歴史小説で歴史を学ぶのは厳禁。
68. 語学は「読む」「書く」「聞く」「話す」のうち、まずは「読む」「聞く」から鍛えるのが王道。
69. 語学に必要なのは「モチベーション」「時間」「お金」。「教養のための英語」では、絶対に身につかない。

70. 現代文の教科書・学習参考書を使えば、読解力、論理的思考力をいっきに鍛えられる。

〔特別付録〕「人から情報を得る」7つの極意

1. 「斜めの人間関係」を重視する。
2. 「初々しさ」を出して「いい聞き手」になる。
3. 数年上の先輩に「白い勉強」と「黒い勉強」を教えてもらう。
4. 人の話を聞くときは「緩やかな演繹法」でのぞむ。
5. 複数の「しゃべる人」の断片情報をつなぎ合わせる。
6. セミナー，講演会，異業種交流会を上手に活用する。
7. 飲み会で仕入れた情報は，翌日「知らないふり」をする。

「白い勉強」とは「一般的な仕事の進め方」，「黒い勉強」とは「表だって上司に相談できないことが起きた場合の対処法」など。(297 ペ)

「緩やかな演繹法」について。取材の際、「この場所でこういう人と会うなら，こういう話を聞けるだろうな」という（仮説実験授業でいうところ）の「予想」を持って臨み，実際のインタビューで予想外の展開があっても，それを臨機応変に活かす方法のこと。(これは本文から柳沢流に理解したもの) (298 ペ)

なんと読みやすい本だろう。とにかく親切な本である。そのまま真似する必要はないし，真似することもできないだろう。だが，池上氏・佐藤氏のレベルがどれほどかということを知っておくと，勉強のしがいがあるというものである。両氏の新聞・本の読み方は読者各自の知的活動に合わせて「縮小」＝「スケールダウン」すればいい。今の私の状況で大切なことは，図書館をうまく利用することだと感じた。インターネットは「上級者」メディアとのこと。時間を奪われないように，心して利用することが大切だと思った。

51 番の「通俗化された良書」の例。阿刀田高著の『やさしいダンテ〈神曲〉』『旧約聖書を知っていますか』『新約聖書を知っていますか』『コーランを知っていますか』等。佐藤：そういう，「直接仕事に関係ないけど，知識・教養として知っておいたほうがいいこと」に関しては，通俗化された良書でうまく時間を使ってほしいですね。(228 ペ)

◎NHK スペシャル「私たちのこれから」取材班(神原一光他)編『超少子化—異次元の処方箋—』(ポプラ新書・2016年)

2016年2月20日に放送された標記番組の内容を中心に構成された本。篠ノ井高校図書館の新刊書コーナーにあったもの。パラパラとめくってみて、人口減少について興味が湧いたので借りることにした。朝の通勤電車内で飛ばし読み。

この本が構成されるに至った問題意識は表紙に書かれたリードに明示されていた。それは次のとおり。

○日本では出生率1.5を下回る「超少子化」と呼ばれる状態が20年以上も続いている。問題は人口減少そのものではない。高齢者が多く、働く世代が極端に少ない人口のアンバランスにある。背景にはいったい何があるのか？これまでの経緯と、深刻な少子化から脱却した成功例を紐解きながら、具体的かつ新鮮な打開策を提案する。

少子化を打開したフランスの成功例を具体的に紹介している。また、国内では2.81という高い出生率を実現した岡山県奈義町について紹介している。

結論は最終章に集約されていた。次のとおり。

○これからの日本を考えるうえで「男性の育児参加」や「働き方改革」の先に、日本社会全体が子育て支援をするよう変化させる「子育てシフト」に舵を切ることが必要だ。(181ペ)

○参考 合計特殊出生率について (Wikipedia より)

合計特殊出生率 (ごうけいとくしゅしゅっしょうりつ, 英: total fertility rate, TFR) とは、[人口統計](#)上の指標で、一人の[女性](#)が一生に産む[子供](#)の平均数を示す。この指標によって、異なる時代、異なる集団間の出生による人口の自然増減を比較・評価することができる。

◎吉川洋著『人口と日本経済—長寿, イノベーション, 経済成長』(中公新書・2016年)

篠ノ井高校の新刊書コーナーで発見。

この本も人口減少についての問題意識から借りてみることにした。文章は簡潔にして明晰。著者(1951年生まれ)の専攻はマクロ経済学。「点検読書」で済ませる。

「あとがき」から引用する。

○今年（2016年）6月、5年に一度行われる2015年「国勢調査」の速報値が公表された。前回10年調査と比べ、一段と少子高齢化が進んだ。65歳以上が全人口に占める比率は26.7%、「4人に1人」を初めて超えた。これは、急速に高齢化の進むイタリア22.4%、ドイツ21.2%などより高く、主要先進国で最も高い。一方で、15歳未満人口の比率は12.7%と過去最低。いまや子どもの数は高齢者の数の半分以下である。

こうした中で人口は減少していく。現在1億2711万人の人口は、このまま放置すれば2065年には8100万人まで減少する見通しだが、政府は1億人の人口維持を目標として掲げている。出産・育児をもっとしやすくするための「子育て支援」は確かに重要だが、出生率を上げて、それだけで「2065年1億人維持」を実現するのは不可能だ。日本では若い女性が少なくなりすぎたから、たとえ一人の女性の産む子どもの数が増えても、もはや人口減少の趨勢を止めることはできない。

人口減少を本気で止めるならば、決め手はドイツが選択した移民の受け入れである。本書ではまったく立ち入らなかったが、移民受け入れには多くの議論がある。しかし、最近の考古学・人類学は、大昔、北から南からさまざまなルートを通して多様な人種が私たちの住むこの列島に移り住んできたことを明らかにしている。歴史が書かれるようになってからも、多くの渡来人（帰化人）が進んだ大陸の文物をこの国にもたらしたことは、学校の歴史で習うとおりだ。私たち21世紀の日本人は、こうした日本という国の成り立ちを改めて振り返ってみる必要があるのではないだろうか。

人口減少が日本という国にとって大きな問題であることは第2章で見たとおりだが、人口が減るから経済成長は無理という議論は正しくない。これは本書で繰り返し書いたことだが、今こそシュンペーターが説いたイノベーションの役割を思い出したい。

（193 ペ）

○本書に登場する経済学者等は次のとおり。

アダム・スミス『国富論』、マルサス『人口論』（ケインズはその「初版」のパンフレットの歴史的意義を評価）、リカード（マルサスの論敵）「自由貿易」論、ゴドウィン、コンドルセ、マンデヴィル、ケインズ、ミュルダール、人口問題に取り組んだスウェーデンの経済学者たち、ダーウィン『種の起源』、シュンペーター「イノベーション」、J・S・ミル「ゼロ成長論」

○ダーウィンは有名な自然淘汰のインスピレーションを、マルサスの『人口論』から得たのである。（34 ペ）



○119 ページに「ジニ係数」「ローレンツ曲線」の説明あるも良く理解できず。これは「格差」問題を考える上で重要な指標になる考え方らしい。ただ、0～1の範囲で求められること、および、この値は国際的な指標として広く利用されているもので、大きくなるほど不平等であると言えるものであることは理解できた。また、このジニ係数は、所得だけでなく、寿命についても各国比較することができる。

○146 ページに「一人当たり GDP と平均寿命」(2010年)の美しいグラフあり。「…私は所得の上昇がさまざまなチャンネルを通して健康を増進し、平均寿命を延ばす、と素直に解釈したい」と著者。

興味を持った部分を引用。

○…経済成長の果実を忘れて「反成長」を安易に説く考え方は危険ですらある。例えば、低成長だった江戸時代をサステイナブルで落ち着きある社会だった、などと言って美化するのはあまりに一面的な見方であると思う。もちろん江戸時代にもいいところがたくさんあっただろうが、「骨が語るお江戸事情」という次の新聞記事のほうが私には実感として納得できる。

東京都内の開発で掘り出された人骨を、国立科学博物館が大量に保管している。ざっと一万人分。……

骨は江戸時代の人々の暮らしぶりを伝えている。栄養状態が悪く、特に鉄分が不足していた。現代なら死亡率の低い若い世代の骨が多いのも特徴で、伝染病がたびたび流行し、人が簡単に死んだことを物語るという。

成人の平均身長は男性が150センチ台半ばで、女性はそれよりも10センチほど低い。日本のすべての時代の中で最も小柄だった。栄養状態が悪い上に狭い長屋などに密集して生活したストレスの影響と考えられるという。「生活は厳しかった。スラムといった方がいい江戸の影の部分が骨には記録されていません」(『朝日新聞』2011年12月17日付夕刊)

すでに見たとおり、「ゼロ成長論」を主張する経済学者もいる。しかし、江戸時代の「実情」と今日を比べれば、われわれは経済成長の恩恵をもっと素直に評価してよいのではないだろうか。(180ペ)

○本書は長期統計グラフが極めて充実している。また、仮説実験授業研究会ではおな

じみの片対数グラフについての補論がある。(ロジスティックな成長プロセス＝需要は必ず飽和する)ただし、議論が数学的に厳密すぎるため、かえって片対数グラフの類似性の追究が甘くなっている。つまり、ロジスティック曲線については本書よりも仮説実験授業研究会の方が研究が進んでいるといえると思った。(190 ペ)

○本書の主張を一言でまとめると、次のように要約できる。

経済成長のカギをにぎるのは人口ではなく、イノベーションである。日本の人口は減少していく流れにあるが、悲観的になりすぎることなく、イノベーションの可能性を追求すべきである。

◎進藤榮一著『アメリカ帝国の終焉—勃興するアジアと多極化世界』(講談社現代新書・2017年)

朝日新聞の書評欄で紹介されていたものが目に留まり、興味が湧いたので図書館にリクエストして購入してもらった。「点検読書」する。気になった部分を次に引用。

○第一に情報革命は、生産構造の軸を、資源労働集約型から知識資本集約型へと変容させた。

いわゆる産業のコメ、つまり主導要因は、かつての資源や労働、資本から、情報(知識)へと転移した。そして情報を満載した半導体と、その周辺技術が、多様な電子通勤機器をつくり出しながら、ものづくりのかたちを変えた。変容は、クルマやエアコン、スマホから、工作機械やバイオ、製薬化学、鉄鋼、さらには金融証券やアニメ映像産業にまで及んでいる。農林水産業は一次(生産)と二次(加工)と三次(サービス)からなる「六次産業」へと変貌する。

その変わる産業構造を、重厚長大型から、軽薄短小型への変容といいかえてもよい。

だから、製品に組み込まれる科学技術係数—知識情報が生み出す価値比率—は、これまでになく高くなる。自動車のような工業製品では70パーセント、ハイテク製品では85パーセントに達する。(内閣府『時の動き』2005年4月号、12頁)

情報技術が、「技術突破(ブレークスルー)」によって、製品自体、もの自体を変えているのである。

そこでの産業競争の決め手は、技術先発国であれ技術後発国であれ、国や企業、市民社会が、科学技術をいかに制することができるかにかかっている。技術後発国が、先発国の先端技術の隙間をかいくぐって、新しい市場を開拓し、技術と市場の「新結

合」—イノベーション—をいかにじつげんできるかにかかってくる。(145 ペ)

○その時、日本のエコノミストたちが唱導してきた、いわゆる雁行形態モデルは崩れていく。赤い夕陽を背に、日本が雁の群れの先頭を飛び、その後を韓国や台湾など NIES が追いかけて、ASEAN 諸国が後につづいて、雁の群れの最後尾を中国やネパールが飛んでいくという、1980 年代までの常識—雁行形態—は崩れる。

… (中略) …

進行しているのは、雁行モデルではなく、蛙跳びモデルだ。

韓国などの NIES はいうまでもなく、圧倒的な技術後発国であった中国、インドが科学技術突破を巧みに利用し、工業先進国に飛びつき、飛び越していくことができるようになった。

工業先進国が先端を走りながら、アジアやラテンアメリカの途上国が順繰りに、先進国の生産システムをなぞって追跡していくという、いわゆるプロダクト・サイクルは終焉する。後発国が、新しい知識と情報を獲得することによって、先行する雁を蛙のように飛び越えて、プロダクト・サイクルを突き崩していく。世界経済の、いわば「下克上の世界」が常態化していくのである。

レスター・サローのいう「知識資本主義」が登場し拡大する。その登場と拡大が、新興アジアに、勃興への「機会の窓」を開いていく。(147 ペ)

○第二に情報革命は、生産様式の主軸を、一国内垂直統合型から多国間水平分業型へと変えていく。

一方で、情報革命が、生産要素—モノとカネとヒト、情報とテクノロジー—をして、国境の壁を瞬時に乗り越えていくことを可能にせしめた。通信技術革命が、国境の壁を取り払って、国々や企業、市民相互間の距離をおびただしく縮めた。

かつてフランシス・フクヤマは、「歴史の終焉」を語って、ソ連共産主義と冷戦の終焉を的確にも予測した。そのひそみに倣っていえば、「地理の終焉」がすすんでいくのである。

いまや北京と東京で、同時テレビ会議やパソコン授業を開くことができる。スカイプやスマホで、相手の顔を見ながら会話し、ビジネスを進めることができる。そして一日経済圏が、東アジアで形成されていく。

早朝に羽田を出て、シンガポールで商談を済ませて、ナイトフライトで帰国して翌朝、東京本社に出勤できる。東京からバンコクまで 4500 キロメートル、ニューヨー

クからロサンゼルスまでの距離と同じ空間に、東アジア単一経済圏が生まれる。

国際政治経済学者は、国々が、一定の地理的空間のなかで、生産や通商を軸に、地域内協力の絆をつくり強めていく国家間協力の制度化の動きと深化を、地域統合と呼ぶ。その呼び方に従うなら、東アジア単一経済圏の成立は、“事実上（デファクト）”の地域統合の生成を意味している。

その歴史は、法制度の積み重ねからなる“法制度上（デューレ）”の地域統合としての、欧州統合の歴史とは異質だ。そのアジア特有の地域統合の歴史が、ゆるやかに、しかし確実に生成展開しつつけていくのである。

統合は、終焉しているのではなく、蘇生しているのだ。（148 ペ）

○カナダ外交から私たちは、同盟について、もう一つの道があることを学んでよい。たとえ強大な覇権国家と同盟を結んでも、同盟を絶対視しない。ましてアメリカ流の生き方に付き従うことはない。

大英帝国の名外交官パーマストン卿の言葉を借りるなら、「永遠の友も永遠の敵もない。あるのは永遠の国益だけである」。その卿の言葉が、対日講話条約（と日米安保条約）の締結に向かう、わが宰相吉田茂の言葉との異質さを際立たせる。

1951年1月、対日講話条約締結のために来日した米国国務省特使（のちの国務長官）ジョン・フォスター・ダレスに手渡した「わが方の見解」で吉田は、「日米間の永久の友好関係のために」とくりかえし懇請していた。その言説によって、米国側から融和的譲歩を引き出すことができるとまで期待していたのである。

疑いもなくそれは、カナダが実践する「同盟の作法」と対極にある考え方だ。帝国アメリカが解体し、アジアが勃興し続けるいま、私たちに求められているのは、したたかでしなやかな「同盟の作法」なのである。（209 ペ）

○「おわりに」

かつて『アメリカ 黄昏の帝国』を書いてからおよそ四半世紀、いま「帝国の終焉」の時を迎えている。その渦中に「帝国の終焉」を読み解く一書を編むことに、言いしれぬ感慨を覚える。

編み終えて最後に思うのは、私たちの世界像の主軸に据えるべきは、もはや、「中進国の罨」ではない、ということだ。

経済学者やメディアはいまでも、中国やインド、ブラジルなどが、工業化の進展下で賃金が高騰し、十分な技術力を持っていないため、成長が鈍化し停滞に陥るとい

「中進国の罨」論を展開する。そして中国などの近未来に黄信号を投げる。

しかしいま論じられるべきは、中進国の罨ではなく、「先進国の罨」ではないのか。その罨が、米欧日の成長を鈍化させ、パクス・アメリカーナを終焉させている。

「先進国の罨」は三様に及んでいる。

第一に、新自由主義（ネオリベ）の罨。

規制緩和を進め、“人間の自由”を極大化させ、富者が豊になれば、富が下に“滴り落ち”て、国と社会が発展していく、というネオリベの罨。その先にカジノ資本主義化が用意されている。

第二に、軍事化の罨。

西側先進国はつねに、かつてのソ連邦にしる、今日の中国やイラン、キューバにしる、「異形の他者」との共生を拒み、その台頭を“脅威”にとらえ、同盟と軍事力強化によって対処しつつけている。その道は冷戦終結後もなおつづき、反テロ戦争の大義名分下でさらに強められている。

第三に、ナショナリズムの罨。

ネオリベや軍事化によって、先進国は追いつけてくる途上国世界の台頭を、抑えることができない。その外交と経済の機能不全のなかで、ここでも他者との共生を拒み、“ナショナリズム”の原基に立ち戻って、かつての、“強い国”を取り戻そうとする。

しかしそれらの三様の方策を進めれば進めるほど、成長が鈍化し、社会が萎えて分断され、衰退を強めざるをえない。トランプのアメリカがそれを象徴する。

まさに西側諸国が、一様に陥りはじめている罨だ。

私たちに問われているのは、この三様の罨からどう抜け出るかという問いだ。それが、日米同盟なるものを“神格化”しながら、アジアとの共生を拒みつつける、ニッポンという「この国のかたち」を問い直しつつける。

それが、本書の最後のメッセージである。

その先に見えてくるもの—それは「西欧の終焉」であり、アジア力の世紀の台頭である。

「資本主義の終焉」でなく、勃興する「資本主義の蘇生」なのである。

問われているのはだから、私たちが帝国終焉後の、アジア力の世紀をどう生き抜くかという問いだ。求められているのは、グローバル化を生き抜く知恵であり、そのための「同盟の作法」なのである。それを、脱亜入欧から連欧連亜の道といいかえてもよい。

本書はその意味で、先に出した『アジア力の世紀』の続編である。(221 ぺ)

文章に独特のクセがある。たとえば「原基」（もとは生物学用語らしい）。こういう熟語があるなんて知らなかった。これも滋味といえば滋味といえるかもしれない。比較的「賞味期限」が限られた本だと推察した。それにしても、本書の「見方」が正しいと仮定した場合、「覇権国の終焉に至る時間」の短いことに驚くばかりである。

### ◎西村寿雄著『ウェゲナーの大陸移動説は仮説実験の勝利』(文芸社・2017年)(私物)

渡辺規夫さんの紹介(上田仮説サークルホームページ)で本書を知った。早春のうちに購入してしばらく「積ん読」。西村寿雄さんが上田を訪問してくれるこの機会にと思い、手に取ってみた。

読みやすい本である。文献調査が隅々まで行き届いているという印象を受けた。

本書にも取り上げてある板倉聖宣著『模倣の時代』(上・下)(仮説社・1988年)とその役割が相似している。図式は次のとおり。

(脚気関連は◆，大陸移動説関連は◇とする)

立論(独創性を発揮した科学者)(現象論的段階)

◆堀内利国「脚気には麦飯が有効である」

◇ウェゲナー「大陸は移動する」『大陸と海洋の起源』

否定

◆森鷗外「そんなはずはない。認めない」

◇地団研「そんなはずはない。認めない」

パラダイム転換が起きた後(実体論的段階)

◆フク・大森憲太「脚気はビタミンB1欠乏症である」

◇上田誠也・竹内均ら プレートテクトニクス理論の完成と普及

歴史的評価

◆板倉聖宣『模倣の時代』(上・下)(仮説社・1988年)

◇西村寿雄『ウェゲナーの大陸移動説は仮説実験の勝利』(文芸社・2017年)および授業書《地球のなぞとき》(2009年)

以上のようなアナロジー(類推)が成立する。つまり、本書は大陸移動説関連の研究において、脚気の解決における板倉聖宣著『模倣の時代』と同様の役割を果たしていると言える。その意義は大きい。さらに、本書は板倉科学史学の精華である「仮説

実験的認識論」を歴史的に位置づける使命も担っている。

◎板橋悟著『新版・なぜ分数の割り算はひっくり返すのか?』(主婦の友社・2016年)

各章のテーマと章末のポイントは次のとおり。

第一章 なぜ分数のわり算は、ひっくり返すのか?

- 「なぜ?」と疑問に思ってみることが、スタート地点になります。
- 作業を習得するための「やり方を覚える学習」ではなく、そもそもの意味を考える「理解する学習」を目指しましょう。
- 人は、頭の中でイメージできないものは、理解できません。理解を深めるために、イメージして記号化する習慣をつけましょう。

第二章 なぜマイナス×マイナスは、答えがプラスになるのか?

- かけ算には、「かけられる数」と「かける数」があり、ふたつは性質が異なるものでした。簡単なものでも、そもそもの本質を考えることが大切です。
- マイナスは、普段の生活の中で目で見たり、手に取ったりがしにくい存在だと分かりました。「基準値からの不足数」と「0より小さい数」の二つの意味があり、反対向きを表す性質があることを確認しました。
- 生活実感のないマイナスのかけ算を考えるとき、具体的思考では理解に限界があります。記号を使って抽象思考で考えましょう。

第三章 公式がなくても、文章題は解ける!

- 公式を覚えなくても、生活実感のあるものならば、感覚で式や答えを求めることができます。
- 文章題は、時間軸で考えると、内容が整理できて分かりやすくなります。
- 時間軸にそってシーンを思い浮かべたら、それを図に書いて「見える化」することで、文章が読み取れるようになります。

第四章 因数分解は、大人になって何の役に立つのか!?

- 因数分解は、ふだんの生活やビジネスの中で、とても役に立っています。
- とくに使うのは、要素を分解して、共通項でくくる作業です。
- 因数分解をすると、発見があったり、効率がアップしたり、アイデアが出しやすくなる。

なったり、問題が解決できるようになります。

## 第五章 ベン図ですっきり！ ロジカルシンキング

○ベン図とは、集合の関係を図で表したものです。

○ベン図を使うと、全体が見えるようになり、「もれ」や「だぶり」を発見できます。

○子どもの頃から、集合やベン図の考え方を身につけることが、ロジカルシンキングにつながります。

## 第六章 数学的思考を、ふだんの生活にいかす！

○因数分解やベン図は、ふだんの生活のさまざまな問題を解決します。

○完璧に使いこなそうとせず、「思考のきっかけ」として取りいれましょう。

軽いノリで読みやすく作られている。イラストも多く、絵本感覚で短時間に通読できた。授業で生徒に分かりやすく説明するために、こういう手法は役に立ちそう。続編が出るようだ。テーマはかなりたくさんありそう。

### ◆ひとことメモ

今月は臨時集会があるので、例会一週間前に設定している締切を一週間分前倒しして、6月9日（金）までの分を出力することにした。

西村寿雄さん（大阪）が上田仮説サークルにいらっしゃる（らしい）ということのをきっかけにして、「積ん読」だった『ウェゲナーの大陸移動説は仮説実験の勝利』（文芸社）を読破することができた。おかげで渡辺規夫さんの発表を聴くときのポイント（問題意識）がさらにシャープに浮かび上がってきた（「きっかけの論理」）。

〔「合格体験記」のレポートとほぼ同時進行で 2017年6月9日（金）16:00 脱稿〕